## 松山幸生先生講述

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全33回--1 2021年8月 写者 小原靖夫

# 松山幸生先生に導かれて

2021年5月2日召天された松山幸生先生の清澄な讃美の導き、先生の御教えを自らの心に刻むべ く、大胆なことを試みようとしています。私にとって松山先生の遺言ともいえる「ヘブライ人への 手紙に学ぶ」全3巻、1000頁を精読したく、個人誌に写記し、自らの信仰の立て直しを考えまし た。33ケ月の恵みに感謝して取り組みます。先生の言葉を忠実に書き 写します。2021年8月80歳の誕生月から毎月第1回分を学びます。

この本は1996年1月から1998年10月に渡る33回、先生を囲む親し い方々に話された講述記録を、参加された方々が3分冊・1000頁の 箱入り本として出版されました。そのご尽力に敬仰し頭を垂れま す。この学ぶ会は「旧約聖書を学ぶ会」と称され始まりは1958年に 遡ります。そして1992年6月「申命記」全4巻2段組1027頁となる膨 大な講述記録を残されています。従って、この「ヘブライ人への手 紙に学ぶ」の聴き手は、そこに参集されていた方々、ある程度の相 互理解の上に展開された内容になっています。

今般、お許しを頂き私の個人の学びとして写経のように、手入力で 写させて頂きます。

手元のパソコンは縦書きが出来ませんので、横書きとさせていただ

きます。時事問題等については中略、又は解説を付して進めさせて頂きます。横書きは読みにくい 場合がありますので、原著にはない段落を付けさせていただきます。何卒お許しお願い申し上げま す。

聖書の引用は「新共同訳」(日本聖書協会)を角ゴチで表記します。文中につけた見出し及び下

先生の講述はは**丸ゴチ (12p)**で、私の解説等は明朝体で少し小さく(11p)で書き分けます。 線は小原によるもので、原文にはありません。



本書は入手不能でありますので、教友で共に学びたい方々とのテキストとさせて頂きます。 如何なる場合でも販売等の営利行為はいたしません。より多くの方が自由に読めるように私の個 人ホームページに特別欄を設定して連載させて頂きます。(ベストピアは35年間無料で発信して おります)

## 松山幸生先生講述

## 「ヘブライ人への手紙に学ぶ」まえがき

旧約聖書の学びから新約聖書の学びに進むにあたり、その間の架け橋的な役割を担う文書として、このヘブライ人への手紙を取り上げました。日頃教会の説教に取り上げられることの少ない文書であるとともに、初代の教会の事情について関心をお持ちの方々や、キリスト教とユダヤ教との関わりについて関心をもたれる方々にも多少お役に立てるのではと思っています。

(この活字が松山幸生先生の話された言葉です)

「ヘブライ人への手紙」はエルサレム神殿崩壊後80年から90年の間に、ディアスポラのクリスチャンに宛てて書かれた手紙と言われています。当時のクリスチャンは二代目のキリスト信仰者であり、その多くははユダヤ教からの改宗者です。彼らは聖書に詳しく、またローマ帝国と同邦人からの迫害に堪えた熱心な信者でしたが、終末の理解について確信がもてず、さまざまな異なった教えにより、その信仰が激しく揺さぶられていました。そのような人々に対して勧告と慰め、叱責と励ましのために書かれた手紙です。(この活字は筆者小原靖夫の文章です)

ユダヤ教の歴史と伝統の中で育まれた人間たちに対してこの手紙は書かれています。

言い換えれば、神に対する予備知識を持った人々に対して、この手紙は書かれていると捉えていただいてよいと思います。

主イエスの来臨以前の人々が、どのように信仰を受け止め、どのように生き、どのように神の言葉と関わってきたかを知るとともに、今日それをどのように継承し、展開すべきかを考え、主の導きの中に努める恵みをいただいて参りました。(過去40年間の旧約聖書の学びを言われております)

こうした視点をさらに継承し、自らの信仰の確立を進めていくために、より直接的な現実の課題の中で、聖書に聴くことを目指して、この学びを進めていくことが必要であると考えます。

時、あたかも21世紀の幕開けにあたり、「私どもの日常生活にとって、イエス・キリスト、そしてその十字架はいかなる意味を持つのか」、また「日常生活において礼拝を献げるとはどういうことか」を共に学んでほしいと願っています。

20世紀末に見られた混迷と混乱とは「神を神と認めようとしない」人間中心の文化が到達した結論であったとも言えるのではないでしょうか。

激しい歴史の変動、経済の流動化の中で目標を見失うことなく、他者の人格と尊厳を認めつつ生きる道が、聖書に秘められていると言っても過言ではないでしょう。

この序文(まえがき)は2001年1月、この著の出版に合わせて書かれたもです。 内容が凝縮しており、難しい表現になっていますが、松山幸生先生は、常に聖書を現代に生る 我々に実存的に話されます。呼び戻される実感を味わいます。 ハイデルベルグ・カテキズムはその第1問において

「生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めはなんですか」と問うています。 私どもはこの問答書が問うている問いに全存在をかけて「私が、身も魂も、生きている時 も、死ぬ時も、私のものではなく、私の真実なる救い主イエス・キリストのものであるこ とであります」

と答え切れた時、主イエスの信仰に生きる者とされていることへの確信に立つことができると言ってよいでしょう。

これからの学びも、主の十字架と復活によってもたらされた、赦しの時、神の忍耐の時を 生きる者としての共通の地盤に立って記された「新約聖書」の御言葉の中から、この作業 を進めていきたいと願います。

そこで、当時内外両面からの脅威にされていたディアスポラに宛てて書かれたヘブライ人への手紙を共にひもとき、そこに展開されている生々しい現実との闘いの中で旧約聖書の知識(幕屋・祭司・犠牲・契約等に関する知識)に通じ、また、その登場人物についても詳しく知っていたユダヤ人改宗者が、さまざまな異なった教えにより激しく揺さぶられ、確信を失いかけていた時、それらの人々に与えられた勧告と慰め、叱責と励ましの言葉を聴き私どもの拠って立つべきものが何であるかを再確認していきたく存じます。

このヘブライ人への手紙は、冒頭において、<u>キリスト論</u>(イエスこそ救い主メシアであることを示す神学的論証)が鋭く簡潔な言葉で述べられており、「神が、絶えざる営みとして人間に語りかけ続けられている歴史」として「時」を捉え、その終末に向けての備えを促しております。(傍線の用語解説は巻末より引用し、少し小さい文字で記しました)

このヘブライ人への手紙の学びを通して、何が正統的な信仰であるのか、何が主をなみする(蔑する) ことなのかをしっかりと捉えて、ゆるぎない信仰生活への指標とすることができればと考えております。

聖書は日本聖書協会刊の「新共同訳、旧新約聖書・続編を用いました。

## 第1回 終わりの時には御子によって語られた。

### 第1章1節から4節

- ①神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られ たが、
- ②この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。
- ③御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。

④御子は、天使たちより優れた者となられました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。

(聖書の引用は角ゴ12pでしるします。行の区切りは聖書通りではありません。乞許・筆者小原)

学ぶところが新しくなって新しい年を迎えると、皆さん方はこの「新しい」ということに意味を見出していらっしゃるかもしれませんが、しゃべる人間はちっとも変わらない人間ですし、それから聖書もずっと昔からあったものですし、「新しい」と言ってよいのかなという気持ちも多少はするのですが、少なくとも旧約聖書と関わる関わり方とは違った視野から聖書と関わっていくという意味においては「新しい歩み」が始まることになるのではないかなと思います。



#### 「神の先在性」

今日はある意味においてはプロローグともいわれるところですので、1章の1節から4節までをご一緒に学んでみたいと思います。まずこのヘブライ人への手紙という表題なんですが「これは本当に手紙なのかな」ということは古くから議論されているところです。

挨拶の言葉もない、誰に送られたのかも、誰が書いたのかも書いていない――、終わりの方で多少手紙らしい体裁が整えられているわけですが――前の方は全く手紙としての様相はないのです。そういう意味では、これは手紙ではないのではなかろうかという意見もたくさんありました。そしてまたこれを書いたのは誰だろうということで、いろいろな人の名前が上がりました。14

でも私たちは、誰が書いたとか、どういう文章だったのかと言うことよりも、ここで何が語られているのか、御霊によって導かれた人が、ここで何を私たちに伝えようとしているのかにウェイトを置いて聴いていったらよいのではないかと思います。そういう文学批判的な、あるいは聖書の原典論的な事柄をここで考えるのではなく、与えられた御言葉に対して集中して学んでみたいと思うのです。

先ず、この1節から4節までを輪読していって、お気づきになったと思いますが、ここでは「大きな前提が一つあります」。大きな前提を設定して、その前提に立脚して物事を考えていく、あるいはそこからいろいろな事柄を推論していくという思考の仕方は、いわば自然科学的な思考方法と非常によく似ています。ですから、その仮定がひっくり返されたら、そこで論じられていることは全部おしまいになってしまう、別な言い方をすれば、この仮定を受け入れない人間にとっては、ここから先展開されていく論理は全く意味を持たないものになってしまう、という部分を含んだ文章であるといってよいと思います。

では、一体どんな前提に立っているのかと言うと「神は被造物に対して絶えず語りかけ続けられているお方である。神は私たちにとっては語りかけてくださる存在なのだ」ということなのです。15

これは、私たちの国で行われている一般の宗教と比較してみますと、非常に顕著な違いがあるのです。私たちは神に対してねぎごとがあるから神に近づき、神に対して感謝があるから神に近づき、神に対して何か私たち一人一人が与えられたいものがあるから神に近づくという形で宗教は成り立って来ています。

ですから語り手の最初は私たちなのです。私たちがものを申して、神がそれに答えてくださる。その答え方が私たちの願いごとにかなっていたり、頼んでいる方向に向くと、この神は本物だという評価をくだす、言い換えると神が最初にあるのではなく、人間が先にあって、私たちの願いや要求があって、それに対してうまく焦点を合わせて応答してくれる神がいた時に初めて「私は神を得た」という言い方をするわけです。

そのような国に生まれ育っていますから、下手をすると私たちも信仰とはそんなものだろうとか、結局私の願いにどれだけ答えてくれるかが、神が神であるかどうかを決めるポイントだろうとか、こんなに一生懸命信仰しているのによいことがちっとも与えられないとすれば、神は何をしているのだろうという言い方をしてしまいます。

このような信仰観、宗教観と言うものを持っている私たちにとって、このヘブライ人への 手紙は正面から「あなた方のそういう発想の仕方を180度変えなさい」と命じるのです。 神が先にいたのです。「神の先在性」というのでしょうか、そういうものが非常に強く訴えられます。

「最初にいたのは神なのだ、そしてその方がおいでにならなかったら一切のことが始まらなかったのだ。神はいるのだ」というところから出発するわけです。ですから例えばヘブライ人への手紙を読みながら「神の存在は果たして本当なのだろうか」と問おうとしてもこの手紙は答えてくれない。なぜなら「最初に神はいるのだ、そこからすべてが始まるのだ」という形で語り始めるわけですから、このことに疑問を持った人間を全く無視した形で、この手紙は書かれているのです。ですから極端な言い方をすれば、当時の社会の中でいわゆる異邦人たち、そういう人々はこのヘブライ人への手紙の中では全く視野に入っていないのです。16-17

ユダヤ教の歴史と伝統の中で育まれた人間たちに対してこの手紙は書かれています。 言い換えれば、神に対する予備知識を持った人々に対してこの手紙は書かれています。 ですから「神に対する予備知識を持っているという前提」が、私たちがこれから、この手 紙を読んでいこうとする時に、果たしピタッと合っているかどうか、ということになると なかなか問題があるのです。(中略)

ヘブライ人への手紙を今、学ぶ理由、目的

しかし、ここでこのヘブライ人への手紙を学ぼうとしているその背景にあるのは何かというと「私たちの信仰とは何なのか」をもう一度確認しておきたいということがあるわけですから、そうだとすれば、まず私たちの信仰というか、「私たちが信仰と考えているもの」と言ったらいいでしょうか「私たちが信じているいう前提にしているものはものが何なのか」を明確にしていくことがすごく大事なのだろう、そしてそこからもう一度聖書を読み直すことが大切なのだと考えたわけです。

それならばヘブライ人への手紙をもう一度読んでみることに意味があるのではないかと思ったのです。おそらく、今輪読しながらここに書いている事は嘘だと思っている人はいないと思うのです。18

第1章1節から4節 聖書 (新共同訳)

- ①神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、 また多くのしかたで先祖に語られたが、
- ②この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました。 神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。
- ③御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、 万物をご自分の力ある言葉によって支えておられますが、 人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座に お着きになりました
- ④御子は、天使たちより優れたものとなられました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。

#### 第1節 神は語り続けておられる.(p18)

「神は、かって預言者たちによって、多くのかたちで、また 多くのしかたで先祖に語られたが」

これはヘブライ人への手紙がまず私たちに伝えたい第一の メッセージですね。

神は語り続けられた、たとえ私たちの先祖が聴く耳を持たなくても語り続けられた。

そして神が一方的に語っているのを受け止めることのできる 背景を持たなくてしまったときには、形を変えてでも神は語 り続けられた。言い換えれば何としてでも、その心の耳に届 かせようとして、「神は語り続けられた」のだと言うことを ここでまず明らかにするのです。



松山先生の書斎中央にある書

「神が語り続けられた」というこのメッセージは、同時に神はそれゆえに「唯一の真実なるお方」でいらっしゃる、「この方を除いて私たちを私たちとして捉えてくださるお方はいない」という信仰の告白が、この言葉の背景にははっきりとあるわけですね。

「かつて」という言葉でこの著者がくくっているのは、私たちの時代に至るまで、継続的に初めから今日に至る間ずっと、その神が初めから今日に至るまで語られたというのが実は旧約聖書なのです。 (19)

神は先ず混沌に向かって語られた。「光あれ」という形でことが起こって来る。神の呼びかけによって全てが始まったというのが聖書なのです。そして、そこに光が存在し、創造のわざが進み、人間が造られた。造られた人間は、神の言葉に従って生きることが求められた。神から委ねられた職責を担うことが要求された。

しかし、造られた初めから人間は、神のようになりたいと考えた。創世記の3章はそうい う人間の姿を描き出すのです。 (19)

#### 荒野に立ち返る信仰(20)

聖書が私たちに告げるメッセージの99%は「神はあなたを愛し、すべての期待をかけていらっしゃる。しかし、あなたは神の言葉に聞こうとはしないで、ほとんど自分の意思に従って生きていこうと願っている。その神の言葉に背を向けるたびに、あなた方は艱難に出遭い、祝福から遠ざけられ、さまざまのいたずきを担って来ているのだ。もしあなたが今いたずきを担い、混乱の中にあり、幸を感じないとすれば、それは神との関係から自ら遠ざかっているからです」という語りかけをするわけです。

エデンの園にいた人間、整えられた恵みの中にいた人間は、神の恵みを感謝するのではなく、自分はもっと賢くなりたいと考えた。そして知恵の木の実を食べてしまった。その後様々な事情の歴史を経てイスラエルがエジプトの奴隷になった(出エジプト記第1章11節以下参照) そしてそこから神の御言葉に従ってエジプトを出てカナンの地に向かって旅を始めた。聖書は非常にそのところの出来事を躍動的に力強く語るのです。

ところが語られている状況はエデンの園とは比べものにならない程、荒廃したところであり、困難が待ち構えているところであり、荒涼としたところなのです。食べるものも飲むものも自分たちの思うに任せない状況なのです。

『しかし聖書は、そここそが神と民とが最も親しく出会った場所だったのだ』と言うのです。20

だから「あなた方の幸せはどこにあるのか、聖書を通して探してご覧なさい」といわれた時に、多くの預言者たちが言ったように「あなた方は荒野に立ち帰りなさい。頼るべきものを皆かなぐり捨てなさい。自分の知識、裁量、自分の力で何とかなると思うような、そんなところに自分が留まることをやめて、『自分の力ではどうにもならない現実の中に立ちなさい。そここそが正に神を神とすることができる場所なのだ』。

あなた方にとって最も幸いな場所なのだ」ということを聖書は私たちに告げるのです。

これは宗教と呼ばれる様々の信仰団体の掲げている宗教の本質とは、ある意味ですごく異質なものなのです。「神と出会う場所は、本当に豊かに花咲き匂い、あなた方は何の苦労もなく、毎日が暮らせる場所ですよ」というような形で私たちに提示する宗教団体はたく

さんありますけれど、聖書は「"荒野"こそ、自分の力ではどうにもならないような現実の中に放り出された時こそ、本当の神と出会えるんですよ」と。

そういう神と出会い続けるためには、幸いになってはいけないし、豊かになってはいけないのではないかと考えるようになるわけです。それは何故かというと、私たちの考えている幸いとか、豊かさとか、安穏とした生活とか、あるいはもう少し極端な言い方をすれば、私たちが願い求めている平和は、神と出会うために、私たちが勝手に作り上げ、勝手に描き出し、勝手に要求しているものに過ぎないのだ。21

神はあなた方をそんなもので釣ろうとはしていないのだ。神が与えようとしているのは「朽ちることのない生命」なのだ「破れることのない夢」なのだ「失われることのない希望」なのだからと聖書は言おうとしています。21

(中略22)

どんなに私たちが長い信仰生活を送っているといっても、その土壇場で「私は死を超えて生きる命を神からいただいていますから感謝です」ということが言い切れなかったら、私たちの信仰というのは、私たちの望みが叶えられていればそれでいい、という信仰でしかないのではないだろうか。

「神が時をくださっている、神がこの私の全ての土台になっていてくださる」ということが本当に生きる支えでなかったなら、そこでどんなに信仰的な表現をもって感謝が満ちているように叫んだとしても、それは本当に神を讃えていることではないのです。22

私の都合が私にとってうまくいっているから、私の神は偉い神だと言っているに過ぎない そういう信仰かどうかを私たちにもう一度しっかりと問い返して来る。これがまさにこの ヘブライ人への手紙なんですね。

先生は「私たちは神の被造物でありながら、神になろうとする。神から離れようとする(罪)を 冒し続けている。しかし、神は語り続けていてくださる(慈悲)。そして『悔改め』を迫っておられる」ことを繰り返し説教でも語られた。その度に私は深く胸が痛み、神の憐れみを感じさせていただいた。

神の熱心・語りかけ続けられる。p23~

先ほど申しましたように、これは離散したユダヤ人たちに向かって書かれたものです。 神を知っている人々に向かって書かれたものなのです。

「あなた方は神を知っているといっているけれど、本当に神を知っているだろうか。 あなた方が知り尽くすことのできない神が、あなた方を知り尽くしていてくださるから、 あなた方は意味を持っているのではないか。あなた方が選民であるのは、あなた方に資格 があるのではなく、神がそうあしらってくださったからに過ぎないのではないか」という ことを、やはりここでもう一度確認させたいという願いをもって、この記者は冒頭 「神は、かつて預言者たちによって語られた」と言っているわけです。 「ここで言われている預言者とは、モーセから始まって預言者の終わりに至るまでの全体を指しています」。モーセが最初の預言者だと考えられているわけです。ですから神はモーセに語りかけて、まず民を救わせた。神の言葉は人々を救い、人々を生かす、そのために神はまずモーセを立て彼らを導かせた。同じように次々と預言者を立て、あなた方に対して神の言葉を語り続けられた。それは神の言葉を聴かせることにおいて、神との関係を間断なく保つためであった。23

これはある意味で私たちに対してすごい聖書の挑戦だと思うのです。あなた方は神が語りかけてくださらなければ、神の方は見ないのだということになるのです。絶えず、間断なく神が語り続けてくださったその歴史が旧約の歴史なのです。別の言い方をすれば、神が語りかけ続けてくださったから、あなた方は選民であり続けたのです。あなた方が神の声を聴こうとしたのではない、と言っているわけです。

これは私たちにとってはすごいチャレンジですね。聖書を読む、毎日祈る、なんていうことを私たちは、自分の人生の中で欠かすことのできない大事な日課の一つとして行っているつもりでいますが、それができるのは、神が語りかけてくださっているからに過ぎないのだ。神が今、語ってくださらなければ、あなたが聴いた言葉は既に過ぎ去った言葉であり、過去の言葉に過ぎない。

聖書を読むときに、私たちは自分に都合の悪い箇所は大体そういうのです。

「これは今の時代じゃなくて、ずうっと昔こんなに情報も満ちていなかった時代で、こんな時代じゃなかった。そこで語られているから、この言葉が意味を持っているのであって、今の時代に置き直すと、これはこういう言葉になるだろう」と、自分で勝手にどんどん翻訳しているわけなのです。そしてそれが都合の良い言葉だから、聖書は私たちの生命の言葉です、なんて言うわけです。

ところが、聖書は初めから私たちに向かって「神の言葉に聴かない者は死ぬ」ということを言っているわけです。「御言葉に従わない者は滅びる」だから私たちは神の声を聴き続けようと努めなければ死んでしまう存在なのです。価値を失う存在なのです。24

そういう自分の立場、生きている根底というものをしっかり踏まえないところで、神と私の関係を考えてみても、それは私の場所をしっかりと確保した上で、あぐらをかいて神と出会っているに過ぎないのですから、そういう出会い方は真実をどうしても覆い隠してしまう。そんな部分が出て来るのではないかと思います。

神は私たちに語りかけ続けている。しかもそのお声を聞くことのできない状態にいる時に は、何としてでも聴かせようとして、いろいろな形で語られた。

これがすごいところです。「聴かせようとして、何としてでも聴かせようとして」という「神の熱心」を私たちはヘブライ人への手紙の中でまず第一にしっかりと自分の心に刻んでおかなければならないのです。「神の熱心」というものが、私たちをして今、神の言葉

を聴くことのできる状態に導いてくださっているのだ。私の信仰、私の熱心ではなくて、 神の熱心、何としてでも聴かせようとする神の執念です。

律法の中では「わたしは妬む神だ」といいます。執念深い神だ、その執念というのは、正に神の言葉を聴かせて人を生かそうとする執念なんですね。私たちを生き続けさせようとする執念なのです。25

どうも日本人は執念深いというのは余りいい意味には使わない。執念深いというのはあまり良くないことで、蛇のように執念深くて、というような言い方をしたりしますから。 p25

「神の妬み」というのは正にその執念ですね。その執念は何かというと、この人を滅ぼさないでおこうという執念なのです。そういう執念は私たちの周囲にはないです。人間社会の中には全然ないのです。だから、そういう妬む神という言葉に対して、時に戸惑いを感じるわけですよ。どうも聖書の中で、神が妬むなんていうことを言っていいのだろうか、神は妬たまない、優しいお方だから、などというわけですけれど、優しいお方で「何でもいいよ」とおっしゃったら、私たちはとっくに滅びているわけです。滅ぼさないために執念深く追い求めて来る神がいてくださったからこそ、今日まで滅びないで何とか生き続けることができている、命を繋ぐことが許されている。

そういうことが「多くのしかた」でという言葉の中にぎゅっと固められている。そういう 表現がここにとられているのです。26

「終わりの時代」をめぐって

#### 第2節

「この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました。神はこの御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました」

「この終わりの時代には」これはまたなかなか私にとって難しい言葉です。(中略)

人間が自分の頭の中で想定して、今が終わりだとか、これが終わりだとかいっている間は終わりはないです。そういうことを勝手気ままに考えている間は、まだ神は私たちが、わがまま勝手であることを深く心の中で傷みながら、悲しみながら、嘆きながら、その私たちに執念深く悔い改めよと迫っていらっしゃいますから、そういう人間が現れている間はまだ終わりではないのだ、安心していていいのだろうと、変ないい方ですけれど、そういうこともできるだろうと思うのです。27

「イエス・キリストが具体的に私たちに救いのみ業をお示しになり始められた時、そして その救いが完成し、再び来たり給う時に向けての歩みが進められている時代、神が隠され た言葉として神の救いの恵みを私たちに語ってくださっている間」というのが一節の「か つて」であって 「見える形にしてその言葉をお示しくださった」それが二節の「終わりの時代」と呼ばれ ているその時代なのだ。

イエス・キリストがお生まれになってから、その救いのみ業を完成してくださり、私たちのために十字架の上で命を捨て3日目に復活なさり、更に40日目に昇天なさり、50日目に聖霊をおくってくださった。28前半

その時代、これはもう神の救いのみ業が究極的な形で私たちの前に具体化して示された時代なのだと言う意味で「究極的な救いの具体的な顕示を現された時」というのを「終わりの時代」という言葉の中に含めていると考えていただいてよいと思います。

そうすると、「この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました」という言葉が生きて来るのです。「イエスを通して神の言葉が見えるようになりました。神の言葉を見せてくださいました」。

しかし、イエスによって神の言葉を見ることもできない人間もいたのです。多くのヘブライ人がそうでした。28

ユダヤ人たちはイエス・キリストがメシアであるとは感じられず、信じられなかったのです。それは彼らが自分なりのメシア像を持っていたからです。自分が描くメシア像に合わないから、イエスはメシアではないと言ったのです。

この、またしても、人の思いが達成されることが大事であって、神の思いに私たちが従う ことが大切ではないという考え方が「ユダヤ教の選民思想」の中にはありました。

聖書の信仰とは「信じてしまえば、あなたは、いつまでも幸せですよ」などとは語らないのです。「信じることは、私たちが救われることだ、救われるというのは現実の世界の中におけるあらゆる尺度をかなぐり捨てること」なのです。神の基準に自らを合わせていくことなのです。具体的な生き方からいけば、それが救われた者の生き方なのです。

「悔い改めよ」・1995年はどのような意味をもっているか 29

一般的な社会の常識的な判断からいえば、昨年の1995年と言うのは大変暗い年でした「三陸遙か沖地震」から始まって「神戸・淡路を中心としたあの激しい地震」があって「オウムの問題」があって、あれがあって、これがあって、「住専問題」が出てきて、だから暗い時代だった、そう総括することもできるんですね。

しかし、私にとって1995年とは何であったかというと、やはり神が支配してくださった 一年間であった。その点においては暗いか、辛いとか、悲しいとかということよりも、神 の御支配をあらゆる形で見えなくさせようとしている現実の力が、すごく働いた年だっ た。

人間の罪が、本当に吹き出してきた一年だったと考えてよいのではないかと思うのです。

隠されていた罪があらわにされた。ヨハネが福音書に書いていますね「神の光に照らされてすべての隠れたものがあらわになった」まさにそうなのです。だから私にとっては神の力、神の働き、神の時がさらに私たちの中に力をもって迫ってきた時なのだと感じることができ、そのような聖書的な視野に立ってものを見ると、暗いこと、辛いこと、嫌なことがたくさんありました。

というのは「逆に言えば私たちの罪がそんなに深い、そんな状況だということが明らさまにされて、多くの人々に神が導きを与え、光を与え、悔い改めるようにとお勧めになった一年であった」。そう感じてよいだろうと思うんですね。30

(松山幸生先生の現実をみる目は厳しいです)

1995年(平成7年)の重大事件

- ①1月7日、三陸沖遙か地震の余震。M7.1、本震は前年12月28日、M7.5
- ②1月17日、阪神・淡路大震災。M7.1
- ③3月20日オウム真理教による地下鉄サリン事件
- ④4月19日、東京外国為替市場で1ドル79.75円 (最高値は2011年10月75.54円)
- ⑤8月戦後初の銀行経営破綻をはじめ信用組合の倒産が続く。三菱銀行が東京銀行と合併で合意する等金融 不況、「住専問題」景気低迷で就職難が続く。
- ⑥9月沖縄県で米兵隊員による少女暴行事件
- (7)いじめを苦にして中学1年生が自殺
- ⑧全日空ANA-857便ハイジャック事件
- ⑨海外ではラビン・イスラエル首相暗殺
- ⑩フランスと中国が核実験強行

「私に、より頼みなさい」「神の言葉に生とは」

ある機関誌に「オウムがとんでもないことをやったので、今日本人の宗教心は大きく揺さぶられている、布教しにくい時代になった。しかし私たちは頑張って布教していきましょう」と書いてある。布教しにくい時代になったから、人間が頑張れば布教できるのだったらこんな気楽なことはないんです。

「神に従おうとしない人間の姿をこんなにはっきり見せてくださったのですから、私たちはこぞって神の前に悔い改めましょうという」というのが、恐らく聖書に立つ信仰なのだろうと思うのです。30

「やりにくい時代になったけれど、私たちが頑張れば何とかなりますから、頑張って明るい世界を取り戻しましょう」と言ったらですね、光は自分たちが輝かすんです。神ではないんです。

「私たちの国では、宗教が今難しい時代になったから、今こそ私たちは結束して信仰とは何か、宗教とは何かを皆に訴えて行かなければ救いが遠くなってしまう」みたいに感じてしまう。

そうしてそのように皆に訴えていった方が教団内部を引き締めるには大変都合が良いので す。 「オタオタしていたら大変だから、今こそ本当の信仰を持っている者らしく生き生きと力強く歩んで行きましょう。そして救いの旗を高く掲げて、ここに救いがあると示しましょう」確かにいいことです。

けれどもそれをやってきた結果、何が起こったかといえば1995年だったのです。それまではいい加減に手を抜いてやってきたのかと訊きたくなるわけです。今こそ結束しようというと、それまで結束しないでバラバラにやって来たのか、自分勝手なことをやって来たのか、それであなた方は信仰していたと言えるのですか、と言いたくなるのですけれど、彼らは真面目にそう考えて書いているのです。それは批判できないのです。31

私たちの中にも同じものがあると思います。今は伝道しにくい時代だ、しかし聖書がいっているように「時が良くても悪くても福音を宣べ伝えなさい」「だから私たちはここで頑張って、我慢して一生懸命で信仰を宣べ伝えましょう。それこそがキリストの救いがこの世の中に大きな力をもって働く機会なのです」などと言うと、いかにも立派で信者の先に立って歩いている牧師なのだと思ってくれるかもしれないのですが、私は「頑張ったのがこの結果ですから、神の前に皆さん悔い改めましょう」などというと、「どうもうちの牧師は駄目だ、景気が悪くて」ということになるのではないかと思うんですね。

でも聖書が求めているのは「頑張ってやりましょう」などということではないのです。 ユダヤ人たちが選民として選ばれたのも「だからあなたは頑張りましょう」と聖書は言っ ていないのです。「わたしがあなた方を救ってあげて選民にしたのは、お前が一番頼りに ならない、駄目な民族だったからだ」と言っているのですから。

100%神は頑張れないことを知っているのです。その神の前で「私は頑張ります」と幾ら言っても「まだ、お前はそのことに気がつかないのか、折角選んでやったのに」と言われるだけだと思うのです。その辺のところが私たちの間ではどうなっているのかなと思います。

私は最初にお断りしましたように、ヘブライ人への手紙というのは、信仰を持っていると考えている人々に向かって語っているわけですから、ノンクリスチャンに向かって語っているわけではないのです。

そういう意味では、救われたと信じている人々に向かって語っているわけですから、「救われたことは、決してあなたが完璧になったからとか、立派になったとかいうことではないんだ。わたしが救わなければどうしようもなかったから救ったのだ。だから、あなた方は、今日から自分を頼りにするのではなくて、わたしの言葉を頼りにして生きなさい。どっちが東か、どっちが西かわからない荒野に立たされたお前たちは、わたしが備えてあげる雲の柱、火の柱に導かれて、その方向に進みなさい。それしか進路はないのだ」という形でイスラエルの民を導かれたのが、あの出エジプトのできごと、荒野の出会いであった。

そこでは彼らは、それに頼るしか自分たちの生きる道はなかった。勝手な方向に進めなかった。だからこそ神は、彼らをカナンの地まで守り導いてくださったとなるわけです。

約束の神の国に私たちが導かれるのは、神が私たちに先立って歩んでくださっている雲の柱、火の柱をしっかりと見つめて、その方向に進んでいくだけなのです。頑張るというのは、「それを見失わないように頑張る、その歩みに遅れないように頑張る」、ただ神の導きに身を委ねてお従いすることが、要するに神の言葉に従って生きることなのです。33

#### 「イエス・キリストについて」2節の後半

「終わりの時代にはイエスによって語ってくださった」

イエスが私たちに神の恵み、救いを明らかにしてくださったと、この文章は私たちに告げます。

イエスというお方はどういうお方かということをここで少し書いています。これはまた後で学んでいく中で出てまいりますからあまり細かくは申しませんけれど、まずここでイエスというお方は、「万物の創造者」であったとありますね。33

「この御子を万物の相続者と定め、また御子によって世界を創造されました」神と主イエス・キリストが一つであることをこういう形で表現しました。イエス・キリストは「万物の創造者」であり、全世界をお創りになったお方です。神の子だから、創造した後生まれてきたのだとヘブライ人への手紙は私たちに告げていない。イエスは既に私たちより先にいまし給うた神と共においでになったお方だとあります。34

#### 3節前半

「御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物をご自分の力ある言葉によって支えておられます」と**書いてあります**。

神の御光を、そして神の御力を余すところなく身におびていらっしゃって、それを充分に 行使することのできるお方であり、そのお方によって初めてすべてのものは今、支えられ ているのです。そういうお方ですね。相続者であり、それを担ってくださる保持者であ る、そのようにここで語ります。

**そして後半、**「人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました」

「この文章は今日の私たちの教会が持っている信仰告白と全く同じです」34 神の独り子であり、神と全く同じお方です、にもかかわらず、彼はこの世においでになり、人となり、全き救いのわざを完成なさって、よみがえられて、天に昇られたお方です。「かしこより来たり給う主を私たちは信じて待ちます」という信仰の告白がここには出ているわけです。私たちはこのイエスキリストが降誕なさったクリスマスを祝います。

そして、しかも、そのお方が異邦人の主であった。神を知らない者をも含めて救い主となってくださるお方であったということを、私たちはマタイによる福音書の第2章を通して教えられています。「異邦人が主を礼拝したということを容認します。異邦人の主と

なってくださったということを、教会の暦の中では『エピファニー』とか『顕現』とか『栄 光』とか『公現』とかいう言葉で呼んでいます」

今年はどういうわけか日本のテレビも教会に対していつもより多少関心を払ってくれました。NHKさんが報道してくださる「行く年来る年」の除夜の鐘。いつもお寺の鐘ばかり聞かせてくださったのですけれど、今年はそうではないのです。

ベツレヘムの町のクリスマス、それから震災で焼け落ちた関西のカトリック教会でのミサも「行く年来る年」の中でちゃんと放映してくださった。そういう中で教会というものも年を越していくのだということを伝えてくれた。それで今年は大分面白い切り口で年末を扱ってくれたなと思ったのですが。

この間の1月7日の夜、やはりNHKの1つの報道の中で東方教会、正教会です。キリスト教の正教会が「正教会のクリスマスは今日なのです」という話をしてくれたんですね。

「あのロシア正教会にしてもギリシャ正教会にしても、ユダヤ正教会にしてもそうなのですけれど、正教会=オーソドックスチャーチは1月7日がクリスマスなのです」35 それは彼らは自分たちは異邦の民であるということを知っているわけです。異邦の民の救い主であることが明確になったのがエピファニー。1月6日の夜なのです。

言い換えれば、太陽暦で言えば1月7日にあたる。夜から始まる日ですから太陰暦でいうと7日の日になっているわけですね。ですから太陽暦の7日ではなくて太陰暦の7日がエピファニーであるわけですから、そういう意味で東方教会でクリスマスは1月7日なのです。そこでそんなことも報道してくれたのですけれど、私はこの東方教会のことがどうのこうのという問題ではなく、「神が私たちを憐れみ、顧みてくださった証がそこにある。イエスの降誕は、正にそうだった、という形で受け止めている東方教会の姿勢は、非常に大事な姿勢だと思うのです」

何となく神はその他大勢一緒にひっくるめてお救いになったのではなく、やはりイエスは 先ずユダヤ人の王としてお生まれになった。

しかし、そのユダヤ人の王としてお生まれになった方を自分の救い主として受け入れた東の博士は、はるばる近づいて行き礼拝を捧げることによって、自分たちの王=メシアにした。

その日、そのことによって主イエスがメシアになってくださった。だから私たちはこのお方を救い主として受け入れるのだ、このお方が私たちの礼拝を受け入れてくださったから、救いはそこで成り立ったのだというの考え方はすごく興味ある考え方だし、大切な考え方ではないかと思うのです。そのようにしてクリスマスは祝われるようになってきました。36

それと同時に、今度はイエスは十字架におかかりになった日、これは「初代教会から、すべての教会が守っている大切な『受難週』があり、『十字架の日=受苦日』があり、それから3日目の『復活の日』がある」。そして復活されたイエスを皆が本当にお祝いして

イースターをするのですけれど、どうも教会っていうところは頭のいい人間がすごく集まっているので、頭の悪い人間にはなかなかくっついていけない部分があるのだなと色々な資料を見ながら思わしめられたのです。

「イエスは昇天して神の右にいらっしゃいます」と信仰の告白ではするのです。ところがそのことを教会がどこまで本気になって自分たちの大切な事柄として受け止めているのかというと、昇天日礼拝をやっている教会はあまりないのです。あるいは昇天日の記念の集会を持っている教会もほとんどないのです。「ほとんど」とあえて言うのですけれど、うちの教会はやっていますから―。ただ祝いづらいです、昇天日は木曜日ですから。イースターが日曜なら40日目というのは必ず木曜日になるのです。だから皆なかなか祝わないのです。37

東方教会ではなく今度は西方のカトリック教会は、このイースターに向かっての期間を「イエスさまの受苦」ということを問題にしようとすることから「聖灰水曜日」をきちんと守っているのです。その水曜日の朝は早くからミサに行って、ミサに参加した方々が、その前の年に教会に献げた棕櫚の日曜日の棕櫚の葉の枝を燃やして、その燃やした灰でおでこに十字架を書いてもらってからお勤めに出て行くのです。

「私たちは主の十字架によって贖われた者であって、十字架なしには死ぬべき存在でした」ということを表明するために、おでこに十字架を書いたものを消さないで一日中それをやるわけですよ。そしてその日の夜、晩禱に出席してもう一度主の前に救いを感謝する、ということをやるわけです。

聖灰水曜日というのはそういった意味では大事な水曜日なのですけれど、これもあまり日本では守られない。だから昇天などというのは余計守られない。ところが、イエスの十字架は、あるいは復活はそこで終わったのではないのです。そのことがらが昇天に結びつき、再臨に結びつくから、意味をもっているのです。

だから本当にそのことが私たちの中できっちり受け止められておかれないと、この「右の座にお着きになりました」とか、「天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました」ということが、私たちの信仰の中で確認されていかないのです。ただ、頭の中でそうなのだなと思うだけであって、信仰生活の中で、ここで!、この瞬間に!としっかりとした受け止めがなされていかないことがすごく多いのです。38

#### 松山先生から私たちへの勧告

「ですから、『私には教会が教会歴を守って、礼拝をしていくことが非常に大事なのだ』 というのは、実は神が歴史を先導していらっしゃるのだから、神が私たちに対して、事を 起こされたときに、それを素直に受け止めていく必要があるからだ」と思うのです。私た ちの暦、私たちの予定がどうであろうとそんなこととは全く関係なしに、 『神がこの日、私に対して、これをなしてくださったということを、しっかり受け止める 習慣をつけて、続けていけば、毎日毎日神が私に何をしてくださったかを受け止めていく ことが可能になって来るのではないか』。

そのように思うと何としても、私は昇天日の礼拝とか、昇天日の記念集会とかをそれぞれ の教会でお持ちになった方がいいのではないかと思うのです」

そうすると、天に帰られた時に天の使いが告げて言った「あなたがたが見ているように、 主はまたおいでになる」という言葉がその場で生き生きと私たちのものとなり、「再臨信 仰」が私たちの中に問われてくるわけです。

私たちが主を見上げていたように、主はまた主に目を注ぐ私たちの前においでくださるというので、「私たちが主に目を注いでいなければ、おいでになるのは見えない」ということなのです。39

当時のユダヤ人たちはやはり「守護天使」ということを信じていました。あのヤコブを守った天使、あるいはイサクを守った天使がそれぞれいた、と信じていましたから、そこでは諸天使というのが出てくるわけです。

あなた方を守ってくださる天使よりも、もっと上の位にいらっしゃる天使、それを超えた お方としてのイエスがおいでになるということで、身近かなところで罪を癒したり、悲し みを慰めたりするのではなく、もっと深いところで、心の奥底まで新たにされることが大 切なんですよということを呼びかけている言葉して、最後の第4節は語るのです。

#### 「イエスをキリストとする」

第4節「御子は天使たちより優れたものとなられました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです」と書かれていますが

そういうユダヤ人たちの習慣とか慣習というものを使いながら、そのすべてを超えて私たちは、それゆえに「イエスをキリストとする』ということの意味がそこにあるのだと言っているのです。

「イエスをキリストとする」ということは、「イエスが私たちの創造者であり、担い手であり、贖い主であり、そしてまた裁き主であることを容認することなのです」ということになるわけです。「だからこそ、『このお方の言葉』に全身全霊をかけて聴き従いましょう。『そのお方の指し示される指』に全身全霊をかけて従って行きましょう」という呼びかけが、この手紙の中でなされているのです。裏返して言えば、そういう「聖書信仰」の形が非常に簡単に「神は御子によって語られました」という言葉で1節から4節までに書いてあるのです。40

序論であると同時に、ある意味で信仰生活の総論がここに出ているのです。私たちはそういう信仰に立って聖書を受け止め、そういう信仰に立って、私たちの歩みを進め、そういう信仰に立ってこの言葉を学んでいきましょう、という序説がここでなされているのだと考えていただいていい思うのです。 1996年1月13日